



# 日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

01

2013.08

## ▶ 理事長挨拶

日本肩関節学会 理事長 井樋栄二

2013年6月

この度、会員向け Newsletter が発刊されることになりましたので、理事長としてご挨拶申し上げます。

皆さん、ご存知のように2012年から本学会は理事・評議員制をとることになりました。これは法人化へ向けての第一歩であります。今、多くの医学会が任意団体から公益法人あるいは一般社団法人へ移行しつつありますが、これは社会的責任と義務を明確にするために必要な手続きです。今年秋の日本肩関節学会の総会において法人化への動きを会員の皆さんに承認していただき、来年夏には一般社団法人としての設立登記へ持ってゆきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願い致します。その他、本学会が今後取り組んでいこうとしている諸課題についてご報告致します。



理事・評議員制の導入に伴って各種委員会を再編しました。財務委員会がつくられ、今後増えることが予想される活動資金の調達にあたります。また、今年度のリバース・ショルダー（反転人工肩関節）の導入に向けてワーキンググループが奮闘中です。さらに広報委員会がつくられ、学会の活動内容、報告事項などを学会員にいち早く伝えるとともに、一般市民を対象にした肩関節疾患の教育、啓発のための活動も予定しています。この Newsletter は会員向け広報活動の第一弾ということになります。

今の日本肩関節学会は内向き志向が年々強くなっているように感じられます。例えば、本学会の公式英文誌であるJSESへの掲載論文数をみると、かつては米国に次いで2番目に多い日本でしたが、現在では韓国を含む諸外国に抜かれ8位です。日本からの掲載論文数は年平均13編であり、過去20年間大きな変動はありませんが、全体の掲載論文数が第1巻の46編から第21巻の287編と大幅に増える中で、日本からの論文の占める割合は年々低下の一途をたどり、日本の存在感が薄れてきていることは否めません。一方、国内誌である雑誌肩関節はA4版になり、掲載論文数が以前と比べて5割増しになりました。国内活動が盛んになる一方で、国際活動は相対的に低下し、ベクトルが内向きになっている。これが今の日本肩関節学会の現状であります。

国際化、グローバルゼーションで世界が一つになりつつある大きな動きの中で、本学会が内向き志向を強めることは日本の孤立化を招き、世界の流れから日本が取り残されてしまう恐れがあります。この内向き志向を外向きに変える、すなわち学会の国際化は今後の学会の方向性を考える上で極めて重要な課題であると考えます。

現在、理事会と国際委員会が中心に対策を検討しています。国際化の手段として、本学会の学術集会の国際化、海外の主要な肩関連学会への参加、Traveling fellowなどを介した国際交流、国際誌への論文投稿などが考えられます。具体的には、現在の日本と欧州とのTraveling fellowに加えて日米のTraveling fellowを始める方向で調整中です。また、学会のプログラムの中の英語セッションをさらに充実させることも必要でしょう。

本学会の公式英文誌である JSES への投稿数を増加させることも急務です。そのような流れの中で和文誌「肩関節」をどのように位置づけるかも重大な課題です。これらは一朝一夕にできることではありませんが、可能なことから一つずつ進めていきたいと思っております。

高岸直人賞の選考基準も見直しています。これまでは受賞論文は雑誌肩関節に投稿することが義務付けられていましたが、これが足かせになって折角の優れた研究が受賞したという理由だけで国際誌に投稿できないという憂慮すべき事態が生じていました。最近では国際誌投稿を優先し本賞受賞を辞退する研究者も出てきておりますが、これは本賞そのものの質の低下にもつながります。今後はこのような足かせを撤廃し、高岸直人賞受賞論文、ノミネート論文ともに自由に国際誌に投稿できるような方向で検討中です。

日本の専門医制度が大きく変わろうとしています。社団法人日本専門医制評価・認定機構のもとで基本領域の専門医が認定され（整形外科専門医がここに位置します）、二階建ての部分に脊椎脊髄外科、手外科、リウマチの3つの専門医が認められることとなります。この3つはそれぞれ脳神経外科、形成外科、総合内科と二階建て部分を共有する競合領域であります。一方、肩関節のような整形外科固有の領域は、将来、関節外科専門医などの大きなくくりで認められる可能性は残っていますが、現時点では全く見通しが立ちません。制度はどうあれ、日本肩関節学会としては患者に質の高い医療を提供できるように会員の教育にあたってゆく必要があります。本学会では、4年前から学会員を対象に教育研修会を毎年開催しています。これは講義だけですが、今後、屍体肩を使った実技指導なども取り入れた教育の場に広げてゆきたいと考えています。若手の国際学会発表や国際誌投稿を支援する体制も整えたいと思っております。明日の学会を担う人材を育てることは何にも増して重要なことだからです。

学会員の皆さんとともに新しくなった日本肩関節学会をさらに発展させてゆきたいと考えています。皆さんの忌憚のないご意見を理事・評議員へお寄せいただければ幸いです。



日本肩関節学会理事：左から（敬称略）菅本一臣、畑幸彦、高岸憲二、玉井和哉（副理事長）、井樋栄二（理事長）、筒井廣明（副理事長）、米田稔、柴田陽三、末永直樹

## ▶ 委員会報告

雑誌『肩関節』編集委員会 委員長 濱田一壽

雑誌『肩関節』編集委員会は、担当理事は菅本一臣先生で、委員長：濱田一壽を含め委員として岩堀裕介先生、岡村健司先生、尾崎二郎先生、菊川和彦先生、後藤昌史先生、杉本勝正先生、橋詰博行先生、原正文先生、福田公孝先生、丸山公先生のメンバーで構成されています。掲載論文の質をよりよくするため、web会議を含め年に4-5回の委員会を開いております。雑誌『肩関節』の査読は、1回目は20名の査読委員と、編集委員以外の評議員、役員は各々10編程度、編集委員は20編程度の論文を3人1組で行っています。2回目以降は編集委員が行っています。最終的に大きな問題のある論文は全員で審査します。

報告事項として、雑誌『肩関節』第37巻投稿論文については、5月20日付で、2回目査読結果が取り揃い、



結果は以下の通りとなりました。

1. そのままで掲載可 125 編
  2. 字句訂正が必要 32 編
  3. Miner revision 35 編 (3.5 を含む)
  4. Major revision 10 編
  5. 掲載不可 0 編
- 以上 計 202 編

査読の際に気になった点を以下に列挙しますが、詳細は投稿規定を参照してください。

著者らがこれまで発表した論文の中に雑誌『肩関節』投稿論文と同じ題材が含まれている場合、別に投稿中の論文に雑誌『肩関節』投稿論文と同じ題材が含まれている場合、必ず「二重投稿に関する誓約書・著作権に関する同意書」に記載して、これらの論文のコピーを4部投稿原稿に添付して下さい。利益相反の開示、学術用語、特定の薬品名、材料名、機器名、略号の使い方などは投稿規定に沿ってください。本文中では、主語と述語を明記し、講演でのメモのように途中で終わらず、である、です、などで終わって下さい。検定の不備にご注意ください。

抄録の引用はできません。他の文献と同一の図表を使用することはできません。やむをえず他の文献から引用した図表を使う場合には、編集委員会の許可が必要です。その他細かなところは後日お伝えします。

現在、主な英文雑誌に向けて、雑誌『肩関節』に掲載した論文の投稿の可否について質問状を作成し、発送の段階です。(JSSESにはすでに投稿可能との返事をもたらしています。日本肩関節学会事務局にお尋ねください。)

その他、雑誌『肩関節』の国際化に向けて審議中です。皆様のご協力よろしくお願い致します。

## QOL 評価表検討委員会 委員長 山中芳

---

QOL 評価表検討委員会は JOA score 検討委員会を元に新しく開設された委員会です。本委員会は担当理事、畑幸彦先生、委員長、山中芳、委員は相澤利武先生、衛藤正雄先生、酒井清司先生、名越充先生、アドバイザーとして三笠元彦先生、特に統計処理等のアドバイザーとして岸本淳司先生の計8名から構成されます。

本委員会の主たる目的は旧 JOA 再検討委員会が完成した shoulder 36 の有用性を確認することと考えます。現在、本委員会では、shoulder 36 が肩鎖関節脱臼、腱板断裂、肩関節周囲炎、関節リウマチ肩、外傷性前方不安定肩に対して有効な評価法となるかを調査中であります。Shoulder 36 に関するご意見等あれば、本委員会に是非ご連絡下さい。これから開始される関節リウマチ肩、外傷性前方不安定肩の調査では、各疾患各 60 - 100 例の調査が必要です。今後の調査では、理事、評議員の先生には、絶大な御協力をお願い致します。

## 国際委員会 委員長 菅谷啓之

---

新生国際委員会は、担当理事が菅本一臣先生、委員長が菅谷啓之、委員として池上博泰先生、佐野博高先生、船越忠直先生、三幡輝久先生、望月智之先生に加え、次期会長黒川正夫先生、次々期会長森澤佳三先生、さらにオブザーバーとして高岸憲二先生を加えた総勢 10 名となります。

当委員会の業務としては、従来、日韓および日欧のトラベリングフェローの募集・審査・派遣、韓国および欧州からのフェローの受け入れ日程・施設の調整が主な役割でありました。そこで、昨年新委員会が発足後ただちに、メールにて『今後国際委員会が果たしていくべき役割』として新メンバー全員より意見を募り、それをもとに 2012 年 12 月 27 日 Web 会議にて第 1 回の委員会を開催し意見交換を図りました。この際、ASES との交換留学、



海外留学の斡旋、英語版HPの充実、学会員の英語力の向上など様々な意見が出されました。その後2013年4月12日のICESES期間中に第2回、更に日整会中の5月23日に第3回の委員会を開催し、一貫してこれらについて討議してまいりました。その成果として、2014年より毎年ASESのClosed Meeting(10月)に合わせて4週程度2名のトラベリングフェローの受け入れがASESに承認され、今秋の肩学会後に早速募集に入る予定です。さらに、3か月から1年以上の海外留学の斡旋を行うことを視野に入れており、実際カリフォルニアのStanford大学やテキサスのBaylor大学より留学生あるいはフェロー受け入れのオファーがあります。

今後も、日本肩関節学会および学会員の国際化にむけて積極的に取り組んでいく所存ですので、宜しくご指導の程お願い申し上げます。また、海外留学やトラベリングフェローを希望する学会員は躊躇することなく国際委員会メンバーにお声掛けください。

---

## 高岸直人賞決定委員会 委員長 黒川正夫

高岸直人賞決定委員会の担当理事は高岸憲二先生、委員長は黒川正夫、委員は青木光広先生、井手淳二先生、熊谷純先生、後藤英之先生、中川照彦先生、橋口宏先生の8人の先生で構成されます。

高岸直人賞は日本肩関節学会の学会賞として位置付けられており、“日本肩関節学会は、学術研究の発展と奨励のために、優秀な業績に対して高岸賞を贈呈する”としており、当該年度の12月31日の時点で満45歳以下の会員の発表論文が対象とされ、受賞は同一人、一回だけの受賞とされています。

本委員会の役割の第一が高岸直人賞の選考ですのでその選考過程を簡単に紹介します。なお、この選考過程は理事長挨拶にもあるように大幅な見直しを行っているところです。

毎年秋に行われる日本肩関節学会学術集会に応募された学会抄録から各評議員の先生に基礎的および臨床的推薦論文を各5編ずつ計10編選んでいただきます。委員長は得票数の高いもの各8編を選び第一次選考論文とし、各委員がその学会会期中の口演内容を審査し、第二次選考論文として適したものかどうかを選考しています。その後委員は雑誌“肩関節”に投稿された第二次選考論文の論文内容を審査し、委員会を開催して受賞論文を決定します。

高岸直人賞受賞論文はJSES(Journal of Shoulder and Elbow Surgery)への日本肩関節学会からの推薦論文となってきました。しかしながら、JSESへの推薦論文は必ずしも45歳未満や同一人一回だけの縛りは必要ないと考えられることから、昨年の評議員会で日本肩関節学会のベストペーパーを選考することが決定され、本委員会がこの役割も併せて行うことになりました。本年度からはここで選出されたベストペーパーがJSESへの推薦論文となりますので、論文作成の励みにしていただきたいと思えます。

またこれらの過程で選考された抄録の上位の基礎論文8編、臨床論文8編の計16編をJSESにベストアブストラクトとして掲載していただいていることも付け加えさせていただきます。

---

## 社会保険等委員会 委員長 中川照彦

社会保険等委員会のメンバーは、担当理事が米田稔先生、委員長中川照彦を含め委員として菅谷啓之先生、杉本勝正先生、高瀬勝己先生、名越充先生、橋口宏先生、望月智之先生、森澤佳三先生、アドバイザーとして佐藤克巳先生、三笠元彦先生です。

社会保険等委員会の主な業務は診療報酬に関すること(外保連を窓口とした手術術式の新設、改訂など)、新しい医療機器の導入に向けた働きかけ、手術のアンケート調査(厚労省に提出する外保連の様式の中に年間の手術数など細かく記載する欄がある)などです。

日本肩関節学会は今年の4月28日に外保連に加盟しました。外保連委員は実務委員：中川照彦、手術委員：



橋口宏、処置委員：高瀬勝己、検査委員：杉本勝正となりました。今後、複合手術（腱板修復術＋バンカート修復術）などを要望していきたいと考えております。

リバースショルダー（反転人工肩関節）の導入に向け、高岸憲二先生や米田稔先生が奮闘中です。薬事承認に際しては、まず日整会でガイドラインを作成する必要があるとのことで、日整会リバース人工肩関節ガイドライン策定ワーキンググループ（担当理事：松末吉隆先生）に日本肩関節学会から委員長として高岸憲二先生、委員として米田稔先生、中川泰彰先生、菅谷啓之先生の計4名が選出され、大変なご苦勞の末、ついに完成されました。先日の広島での日整会理事会で無事、このガイドライン（案）が承認されたとのことですので、リバースショルダーの薬事承認もそう遠くないと思われます。

手術アンケートに関しては前回2009年の1年間の肩関節の手術件数を症例ごとに提出していただきましたが、今年も手術アンケート調査を行うことにいたしました。2013年1月1日～12月31日までのものです。今年の12月ごろアンケート用紙を会員の先生方に郵送しますが、1施設につき1つでお願いいたします。手術アンケートは今後も4年に1度行いたいと考えております。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

## 教育研修委員会 委員長 井手淳二

教育研修委員会は末永直樹担当理事、青木光広委員、望月由委員、山本宣幸委員と井手淳二（委員長）で構成されています。教育研修会を年1回、学術集会の翌日に開催しており、今年で5回目となります。本研修会の目的は、代表的肩関節疾患の基本的概念を習得することです。毎回、研修会用のオリジナルテキストを各講師にお願いして作成しています。また、毎回アンケート調査を行っており、本研修会への要望等を反映できるようにしています。また、講師も評価されます。第5回は、第4回の講師陣と同じですが、15分では講演時間が短すぎる、統計学は本研修会には必要ないのではないか、リハビリ・診察法の講義がききたいなどの意見が複数あったため、これらの要望、意見に迅速に対応し、各講演を15分から30分（5分間の質疑を含む）として以下のようになりました（敬称略）。

肩の診察法とリハビリ	筒井廣明
肩の解剖とバイオメカニクス	青木光広
腱板断裂の病態と診断	井手淳二
腱板断裂の治療	柴田陽三
肩関節不安定症の病態と診断	山本宣幸
肩関節不安定症の治療	井樋栄二
上腕骨近位端骨折の診断と治療	末永直樹
肩関節疾患治療のトピックス	望月由

統計学も重要な分野ですが、今回は学術集会での講演にさせていただくように黒川正夫会長にお願いいたしました。講師の皆様には、学術集会翌日まで負担をおかけいたしますがよろしくご依頼致します。今後も開催時期、日程、内容について継続審議し、より充実した教育研修会を目指しますので皆様のご意見をいただけましたら幸いです。また、屍体肩を用いた手術実技実習について今後、教育研修会に取り入れられるように慎重に審議をすすめています。

以上、教育研修委員会の現況を報告しました。

## 学術委員会 委員長 森澤豊

学術委員会は担当理事は畑幸彦先生で、委員長森澤豊をはじめ委員として伊崎輝昌、後藤昌史、佐野博高、



高瀬勝己、林田賢治、船越忠直、望月由の各先生で構成されています。肩関節疾患には、日々遭遇するもの 외에도にガイドラインのないものや、長期経過の不明なもの、定義の明らかでないものなどが多々存在します。こうした疾患に対し、日本肩関節学会として科学的根拠と一致した見解を示し、整形外科医のみならず国民に周知していくことはインフォームドコンセントの必要性が高まっている昨今意義あることと考えます。

このような流れのなかで当委員会では、前向き研究を多施設間で継続して行えるように、学会員を主たる対象者として協力、参加をお願いすることとなりました。その第一回目の企画として、肩鎖関節脱臼(Rockwood分類 type III)の保存的治療についてのプロジェクトを作成し、学会ホームページの冒頭に掲載しています。研究に参加して頂ける先生は日本整形外科学会専門医であることを条件としております。参加を希望される方はホームページから指定された項目に記入していただき日本肩関節学会事務局にアクセスして頂ければ幸いです。

今後は腱板断裂や脱臼をテーマとした前向き多施設間研究を企画検討しており、ニュースレターでお知らせする方針です。多くの施設からの参加および御協力をお願い申し上げます。

## 広報委員会 委員長 池上博泰

広報委員会は、担当理事が筒井廣明先生、委員長が池上博泰、委員として中川泰彰先生、山本敦史先生、新井隆三先生、松村昇先生を加えた6名からなります。広報委員会は、日本肩関節学会が理事・評議員制の導入となり、井樋理事長の下、今回はじめてできた委員会です。2013年4月11日のICESES期間中に第1回、日整会期間中の5月23日に第2回の委員会を開催し、この委員会の業務および今後の活動内容について討議してまいりました。その結果、広報委員会の業務は、日本肩関節学会を広く一般の人(海外も含めて)に知らせることと、日本肩関節学会員に情報発信していくことの二つであることが確認されました。このために、従来からある日本肩関節学会ホームページのさらなる充実、特に英語版HPの充実を最初に行うことと会員へのニュースレター作製の二つを中心に今後活動していくことを委員会で決定しました。すでに英語版ホームページについては新しく作製したホームページをまずは広報委員会で閲覧修正したので、7月には理事、評議員に閲覧してもらい、修正改善した後、一般に開示していく日程で動いています。また、会員へのニュースレターは学術集会開催時期を考慮して、毎年7月と1月の年に2回の発行を目指すこととなりました。まずは記念すべき第一号がこの原稿が含まれているニュースレターということになります。

今後も、日本肩関節学会の広報活動に積極的に取り組んでいく所存ですので、宜しくご指導の程お願い申し上げます。

## 役員選挙管理委員会 委員長 伊崎輝昌

日本肩関節学会は2012年に理事・評議員制に移行しました。これに伴い役員選挙管に関する事務を行う目的で日本肩関節学会役員選挙委員会(選挙管理委員会)が設置されました。設立時の選挙管理委員会委員は、役員会同意の上、日本肩関節学会会長より委嘱をされております。

選挙管理委員会は以下の委員2名で構成されています。

委員長 伊崎輝昌 (福岡大学)

委員 小林勉 (群馬大学)

選挙管理委員会は、日本肩関節学会会則第10条に定める役員選出に関して、日本肩関節学会役員選挙規則に則り、選挙管理執行に関する事務を行なっています。

具体的には、以下の選挙の管理執行に関する事務等を行なっております。

- ・日本肩関節学会役員選挙規則に定める役員選挙

・日本肩関節学会学術集会会長選挙規則に定める日本肩関節学会学術集会会長の選任  
選挙管理委員会としては、適正な事務処理を進め公正・中立な選挙運営を心がけていきたいと考えております。

## 定款等検討委員会 委員長 中川泰彰

担当理事は、柴田陽三先生、委員長は中川泰彰、委員は伊崎輝昌先生、岩堀裕介先生、林田賢治先生、森澤豊先生のメンバーで構成されています。また、委員会には、オブザーバーとして玉井和哉先生に入っただき、公認会計士の柄澤徹先生にも、4月10日の第2回委員会からご出席いただいています。事務局からは小林勉先生にご参加いただいています。

現在任意団体である日本肩関節学会を一般社団法人化させることがこの委員会の使命であり、それに向けて、現在の日本肩関節学会の各種の規定を一般社団法人の定款に合うように、修正しつつあります。5月23日の臨時評議員会で議題となった、いつ法人化するかについては、現在、日本肩関節学会の総会で法人に移行することの決議ができていませんので、今年9月の総会で決議し、来年7月1日ごろに登録する方向で進んでいます。また、法人化するに当たり、現在の規定を変更せざるを得ない重要項目（代議員制の導入、会計年度をいつにするか、役員の任期、委員会での役員の選挙権など）について、9月の評議員会で皆様のご意見をうかがう予定です。

## ▶ KSES トラベリングフェロー

### 2013年日本・韓国肩関節学会交換留学生帰朝報告

高知医療センター 整形外科 福田昇司

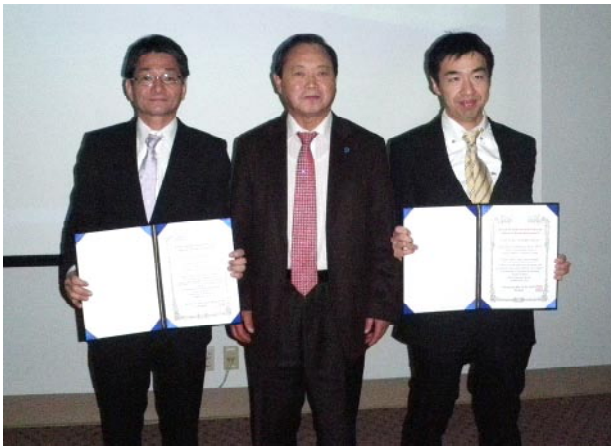
2013年日本・韓国肩関節学会交換留学生として、獨協大学の吉川勝久先生とともに2013年3月17日から4月5日までの日程で韓国を訪問しました。今回は釜山から北上し、蔚山(Ulsan)、大邱(Daegu)、広州(Gwangju)、大田(Daejeon)、そしてソウルでは第21回韓国肩肘学会をはさんで複数の施設を見学しました。前半部分を私が担当し、そしてソウルでの後半を吉川先生にお願いすることとしました。

3月17日、成田から釜山へ到着するとすぐに、釜山肩肘研究会のメンバーの前で発表しました。3月18日は午前中、釜山国立大学病院で手術を見学し、午後には東亜大学病院で施設見学。その後車で蔚山へ移動し、蔚山大学病院の肩関節シンポジウムに参加しました。蔚山大学のSang-Hun Ko教授は次期KSES会長です。3月19日は朝からKo教授の手術を見学し、夕方には大邱へ移動。3月20日は大邱カトリック大学を訪問しました。Chang-Hyuk Choi教授はKSES前会長です。近い将来日本でも使用可能になるであろうreverse TSAをみるのが大きな収穫でした。

3月21日からは3日間広州に滞在することとなり、毎朝荷物をパッキングしてホテルをチェックアウトする慌ただしい日々から開放されました。3月21日は午前中東亜病院で手術見学をし、午後は広州地区のホストの朝鮮大学のYoung-Lae Moon教授とともに2015年に開催されるユニバーシアード設立委員会を訪問しました。3月22日は朝鮮大学の早朝カンファレンスに参加した後、Moon教授の手術を見学し、午後は全南国立大へ移



蔚山大学でのシンポジウムにて



KSES 大田-忠清支部会でKwan-Jin Rhee先生と一緒に

動して Myung-Sum Kim 先生の手術を見学しました。3月23日は土曜日ですが、午前中に21世紀病院で手術見学をし、午後は初めての観光。3月24日にKTXで大田へ移動しました。

3月25日には古くからの友人である乙支大学の Kwan-Won Lee 教授と再会しました。夜は私たちのために歓迎会を開いていただきましたが、忠南大学を退官された Kwan-Jin Rhee 先生やソウルから Seung-Ho Kim 先生も参加していただきました。3月26日は終日、忠南大学で ARCR 5例を見学。夜は韓国肩肘学会の大田・忠清支部会で発表し、K-J Rhee 先生から感謝状をいただきました。3月27日朝

にソウルへ出発。韓国南部での約10日間の日程が終了しました。

3週間という日程はあっという間に過ぎましたが、私自身の今後の臨床に非常に役立つ経験となりました。短期間に多くの施設、多くの手術を見学することができるため、若い先生だけでなく経験豊かな中堅の先生にも非常に有意義なプログラムだと思います。これからも両国間の友好関係が続くように、少しでも貢献できればと考えています。

## 2013年日本・韓国肩関節学会 Traveling fellowship 帰朝報告

獨協医科大学 整形外科 吉川勝久

はじめに

2013年3月17日から4月5日までの3週間、日本・韓国肩学会 Traveling Fellow として訪問しました。前半は福田先生にお越し、ソウルへ移り、韓国肩肘学会 (KSES) とソウル周辺の施設を訪問させていただいた後半を報告させていただきます。

3月28日(木)

Kyung Hee University Hospital の Yong Gil Rhee 先生を訪問しました。ABR1件、SLAP1件、ARCR3件、ORCR1件(広範囲断裂)、Laterjet法1件の7件を器用にこなされておりました。

夕食は、日本の KSES 参加者と KSES のボーディングメンバーとで食事会が行われ、爆弾酒が飛び交う楽しく危険な Dinner を楽しみました。

3月29日(金)～3月30日(土)

Konkuk University Hospital にて韓国肩肘学会が開催、特に腱板断裂のセッションでは、著明な教授陣が質問に列を作る程熱心に議論されていました。Laurent Lafosse 先生、高岸憲二先生と中川照彦先生が招待されており、大変勉強になる講演を聞くことができました。

2日目は朝7時開始で、朝から活発な討論が行われました。私達もトラベリングフェロー口演をさせていただき、学会長の Seung Ho Kim 先生から質問をそれぞれいただきました。

4月1日(月)

Madi Hospital の Seung Ho Kim 先生を訪問しました。エコーが各診察室に併設してあるなど、プライベート



第21回韓国肩肘学会にて



ホスピタルならではの充実した施設を体感しました。手術は、石灰沈着性腱板炎 1 件、ARCR2 件、ABR の Revision1 件を見学させていただきました。手術は非常にスマートで勉強になり、また唯一外来診療を見学させていただけた病院です。手術後、Seminar を開いていただき、私達もプレゼンテーションをさせていただきました。

4 月 2 日 (火)

Gachon University Gil Hospital の Young-Kyu Kim 先生を訪問しました。

1 例目は Massive 腱板断裂に対して Offset をつけ外旋力を出す BioReverse TSA を行っておりました。2 例目は ARCR で Medium Size に対して Suture Bridge を見学させていただきました。

4 月 3 日 (水)

Catholic University Hospital の Kim, Yang Soo 先生を訪問しました。

ARCR3 件、AC separation に対して鏡視下烏口鎖骨靭帯再建術を行っておりました。

日本では使用できないデバイスを使用し、非常に興味深く拝見させていただきました。

午後からは SAMSUNG MEDICAL CENTER の Jae Chul Yoo 先生を訪問しました。ARCR1 件、PASTA1 件を見学いたしました。腱板修復は、Foot Print に MicroFracture を行い腱骨結合部での癒合効果を図っており、こだわりを感じました。



ソウルのホストの先生との最終日の宴会にて

4 月 4 日 (木)

Konkuk University Hospital の PARK, Jin-Young 先生を訪問しました。

ARCR2 件に対して Suture Bridge を行っておりました。いままでの訪問先では、見られなかった修復後関節内鏡視で関節内を確認され堅実な手術をされておりました。その他 ASD1 件、UCL 再建術後 AS (ELBOW) 下骨棘切除 (肘頭窩)、RTSA1 件、上腕骨 Epicondyle 骨折 1 件見学させていただきました。

夜は伝統的な韓国料理屋で、ソウルのホストに集まっていたいただき宴会をしていただきました。韓国の勢いを感じつつ、翌日帰国となりました。

韓国の先生方は非常に友好的で、過ごしやすく、短期間に多くの手術見学でき、貴重な体験をさせていただきました。

今回選出していただいた肩学会会長の中川照彦先生、国際委員長の玉井和哉先生、事務局の小林勉先生にこの場を借りて心から御礼申し上げます。

## ▶ 次期学術集会会長あいさつ

### 第40回日本肩関節学会学術集会の開催にあたって

済生会吹田病院 黒川正夫

第40回日本肩関節学会学術集会を本年9月27日-28日にウエスティン都ホテル京都において開催させていただきます。

1974年に第1回の学術集会が開催され、1997年には第24回を恩師の平澤泰介先生が京都で開催されました。第40回の節目の年に本学術集会を再び京都で開催させていただくことを誠に光栄に存じます。

日本肩関節学会は世界最古の肩関節の専門学会であり、設立以降先輩諸先生方の着実なご努力により、また現在を支える中堅の先生、若手の新進気鋭の先生方が一体となり、発展を続けているところです。今年2012年からは理事・評議員制が立ち上がり、井樋栄二理事長のもと学会の国際化、肩関節疾患の診断治療の標準化、肩関節を志す若手医師の育成などの課題に系統的に取り組まれています。

肩関節疾患の診断、治療は、近年、大きな変貌を遂げ、ともすればわかりにくい、難しいなどと揶揄されていた分野も、科学的な裏付けがなされ、わかりやすい関節になりつつあると考えています。また、さまざまな基礎研究や疫学調査と新しい知識、方法論、技術やハードウェアの進歩、ソフトウェアの発展により、より科学的根拠に裏付けられた病因、病態が明らかになり、診断法、治療法の発展につながっています。

本学術集会が肩関節学会の40年の伝統、歴史を踏まえ、次の10年の礎となる会でありたいと思います。

そのためには肩関節を専門にする医師のみならず、併催いたします第10回肩の運動機能研究会に集う肩にかかわる多職種の皆さんにもご出席いただき、有意義な会にしたいと願うばかりです。

日本肩関節学会は過去には原則1会場で、厳しい議論が行われていました。最近は学会員の増加や肩の運動機能研究会の併設などの影響で演題数、会場が増え、厳しい議論の場が少なくなったと感じます。学術集会のあり方にも改善の余地があると考え、会場ごとにほぼ確立されたテーマ、基礎研究やトピックス、若手医師の育成などの異なった目的を持ちながら構成してみたいと考えています。

海外からは米国からASES会長のJeffrey Abrams先生に関節鏡視下手術のTopics、ヨーロッパからはオランダのJaap Willems先生に人工肩関節について、韓国からはKSES会長のSang-Hun Ko先生にご講演をお願いいたしました。

シンポジウムとして“腱板断裂：画像診断を治療にどう生かすか”、“腱板断裂術後リハビリを科学する”を企画し、後者は肩の運動機能研究会との合同シンポジウムとしました。腱板断裂とリハビリテーションについて科学的根拠に裏付けられた保存療法や術後リハビリテーションのあり方について議論を深めたいと考えています。

パネルディスカッションとして“腱板断裂：一次修復不能な場合の対処”と“肩関節周辺骨折の最小侵襲治療”を取り上げました。

肩関節学会にいただいた演題数は387題（外国人23題を含む）、肩の運動機能研究会164題を合わせると551題の応募をいただきました。できるだけ多くの医師、コメディカルの皆様の研究成果をご発表いただき、今後の肩を取り巻く医療に役立てたいと思いますのでよろしく願いいたします。

最後に学術集会の翌日9月29日（日）午後には市民公開講座として47community（元プロ野球投手）工藤公康さんを招いて“未来ある野球少年へのメッセージ - けがなく元気に野球を続けるためにはどうすればよいのか - ”も予定しております。

会員の皆さん、それを取り巻くコメディカルの皆さんには熱い議論とともに夏の終わりの京都を楽しんでいただけるよう準備いたします。よろしく願いいたします。



**編集**

広報委員会 委員長

**後記**

池上博泰

何とか予定通りに、会員向け Newsletter の記念すべき第一号が無事に発行できてホッとしています。巻頭の理事長挨拶にもあるように、日本肩関節学会は昨年より理事・評議員制をとることになりました。本文中でも記した通り、この制度となって新しく広報委員会が作られ、今回のような会員向け Newsletter の作製と学会ホームページのさらなる充実を目指して活動しています。この Newsletter は年に 2 回の発行を目指してこれからも活動していく予定です。

今回は井樋理事長の挨拶、各委員会報告、2013 年日本・韓国肩関節学会交換留学生帰朝報告、秋に開催される第 40 回日本肩関節学会学術集会の黒川会長の挨拶を掲載いたしました。ご多忙中にもかかわらずご執筆いただきました先生方に深謝いたします。

日本肩関節学会が法人化へ向けて動き出していることをはじめ、現在の活動状況、方向性、問題点のご理解を深めていただける内容ですので、会員の皆様方には、ぜひともご一読いただきたいと思っています。

当広報委員会でも担当理事の筒井廣明先生、新井隆三先生、中川泰彰先生、松村昇先生、山本敦史先生、そして私と皆で協力して、正確かつ迅速な情報発信、ホームページの充実等に一層努力していく所存であります。

会員の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

